

われわれは、震災により遺族との死別を体験した子どもたちの心の傷をどのように理解し、援助活動を行うのか。援助活動を行っていくためには、さまざまな悲しみの体験に影響を与えている要因の解明と、その要因の相互関連を明らかにする必要がある。子どもたちが悲しみから、心理的に回復していくことを遅らせている要因には、子どもの心身後遺症・トラウマ反応、親のストレスがあり、回復を促進させるのが死者や生者とのコミュニケーションであるという。論文が問題にしているのはこの点である。

さて、この論文の調査・分析方法を中心にコメントすることにしよう。

この論文の研究方法は、量的な調査法と、インタビュー記録や自由回答の内容を対象にした質的な調査法の双方が用いられている。この2つの調査方法をミックスして用いているといったほうが妥当であると思うが、双方の研究方法の強みをどのように活用しようと思図しているのかが評者にはいまいち理解できなかった。

論文のタイトルは「震災遺児の死別と悲しみ」となっているが、このタイトルから研究の分析対象をイメージできるが、どのような研究の方法でアプローチしようとするのか全く分からなかった。一般的なことになるが、論文タイトルには、研究の対象と、アプローチの方法という双方を示すような工夫が必要ではないだろうか。

また、先行研究を用いた解釈的な方法も平行して用いられているが、文章を読んでいて、先行文献に基づいているのか、データに基づいた解釈なのか不明確な部分が気になった。先行研究に依拠するのか、データに依拠した見解なのかに敏感になって文章を組み立てる必要があるといえないだろうか。

株本氏がケーススタディと証する質的な調査は、量的な調査を行うための要因解明・仮説捜しのもと、自由記述記録とインタビュー記録の内容に基づいて解釈する方法が用いられている。問題を明らかにしたり、仮説づくり以外に、質的な研究方法を1つの柱として位置付ける研究であるのなら、インタビュー記録の収集に関する説明が必要ではないだろうか。仮説を立てるための質的調査と、事象を解釈するための質的調査を同じレベルの作業として行ったのかどうか、理解できなかった。評者は、一人のインタビュー記録に基づき、解釈的な説明を行うことも可能であると考えているが、「悲しみの緩和」を説明する際などは、もう少し詳細な質的データの提示が必要ではないだろうか。

以上、この論文の研究方法場の問題点を述べたが、われわれソーシャルワーカーは、この論文で提示された知見を活用して有益な援助活動を行っていくことができる。殊に、子どもの抱える「悲しみ」を心理的に回復させることを遅らせている要因と、回復を促進させている要因の抽出は注目に値する。しかし、この論文のように心理学的方法に基づく研究を「社会福祉学評論」に掲載することの是非は今後問われるべきであろう。この種の研究をどのように社会福祉学に取り組みのかということについて、学会として共通認識を持つことが求められている。